



ケアと対話に関する一考察 : ネル・ノディングズと マルティン・ブーバーを手掛かりとして

星川, 佳加

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 17(1):1-9

(Issue Date)

2023-09-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100483324>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100483324>



ケアと対話に関する一考察

—ネル・ノディングズとマルティン・ブーバーを手掛かりとして—

Study on Care and Dialogue

: Referring to the Nel Noddings's Theory and Martin Buber's Thought

星川 佳加*

Yoshika HOSHIKAWA*

要約: 本稿ではノディングズの〈ケア〉とブーバーの〈我と汝〉及び〈対話〉を考察することで〈ケア〉の構造を明らかにし、教師や子どもたちが他者の言葉にならない思いや願いに応答するという実践的事実を捉える仮説概念として〈ケア〉を規定しようと試みた。第1節ではノディングズの〈ケア〉にブーバーの〈我と汝〉が影響を与えていることと、〈我と汝〉とは何かを確認した。第2節ではこの〈我と汝〉は言葉を伴わない〈対話〉であること、その思想の根底に言葉として表現されない他者の思いをめぐるブーバーの経験と反省があることを確認した。第3節ではこの〈対話〉が〈ケア〉を構成する「専心没頭」と「動機の転移」のうち前者にあたること、故に〈対話〉における〈応答〉は「動機の転移」に導かれる「応答」と区別されることを明らかにした。以上の考察を通して〈ケア〉とは内面的な〈対話〉を通して他者の言葉にならない思いや願いを捉え、これに言動を伴う「応答」をすることであると規定した。実践上、教師や子どもたちは他者の言葉にならない思いや願いに即座に言葉や行動を返すことが多く、〈応答〉と「応答」は時間的にほとんど重なっているように見える。しかし「教育におけるケア」を考えるうえで、〈応答〉と「応答」を理論的に区別することは重要である。

キーワード: ケア, 対話, 応答, ネル・ノディングズ, マルティン・ブーバー

1. はじめに

本研究は、近年日本の学校教育において注目されている「ケア」について考察するものである。その際、アメリカの教育哲学者ネル・ノディングズ (Nel Noddings) のケア論と、彼女に影響を与えたユダヤ人宗教哲学者マルティン・ブーバー (Martin Buber) の思想、特に「対話」概念を手掛かりとする。

「ケア」という語は現代の日本において様々な用いられ方をしている。学校教育における「ケア」に限定しても、「癒し」に近い意味で論じられることもあれば、「福祉」や「カウンセリング」と結びつくものとして言及されることもある。このように様々な用いられる理由として、「ケア」がもともと英語圏で日常的に用いられる語であるために多様な日本語訳が可能だということが考えられる。

もう一つの理由として、「ケア」が学術的な用語とされる今日までに、多様な立場や視点から「ケア」が論じられてきたことが挙げられるであろう。

ケア論の源流としてしばしば言及されるキャロル・ギリガン (Carol Gilligan) は、男性中心主義的な倫理学・発達心理学への対抗を込めて「ケア」という語を用いた。ネル・ノディングズは教師、シモヌ・ローチ (Shimone Roach) は看護師の立場で「ケア」を考究した。「ケア」を論じた先駆的存在として位置づけられる哲学者のミルトン・メイヤーロフ (Milton Mayeroff) は「父」的な立場から、「母的思考 (mothers thinking)」を考察したサラ・ルディック (Sara Ruddick) や障がいをもつ娘の母であるエヴァ・フェダー・キティ (Eva Feder Kittay) はそれぞれ独自の「母」的な立場から、「ケア」を論じている。日本でも多くの哲学者や倫理学者、教育学者などが「ケア」に注目してきた。社会学者上野千鶴子や政治学者岡野八代らフェミニストも「ケア」の議論に加わっている¹。

紙幅の関係もありここではすべての「ケア」研究に触れることは叶わないが、あらゆる「ケア」論者が、

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期課程院生

(2023年3月31日 受付)
(2023年6月07日 受理)

それぞれの視角から「ケア」に注目しているということができるであろう。そのいずれの「ケア」に対しても、恐らく完全に否定することは難しい。各論者が「ケア」という語を用いている文脈や目的を共有することができれば、いずれの「ケア」論も一定理解することができる。

こうした「ケア」の百家争鳴ともいえる状況下であえて「ケア」を論じるためには、自らがどのような問題意識に基づき、誰の「ケア」に注目するのかを明確にしたうえで、自身の研究における「ケア」の射程を定め、考察を深めていく必要がある。

本研究は、ノディングズのケアに焦点をあてる。彼女のケア論は、かつてフェミニストの間で厳しい批判を受けたこともあり、「古い」ケア論だと評されることもある。しかしながら本研究が今改めて彼女のケアに注目することには、当然ながら理由がある。彼女の理論には、「他者の言葉にならない思いや願いに応答すること」としての「ケア」を考究する手掛かりが見いだせるのである。なぜそのようにいうことができるのかについては、本稿を通して明らかにしていく。その前に、本研究が「他者の言葉にならない思いや願いに応答すること」に焦点をあてる理由を説明したい²。

新自由主義的な価値観が日本社会に広まったと言われるようになって久しい。学校教育もその影響を免れることはできず、学校間や子ども間の競争が煽られ、自己責任論が蔓延り、「問題を起こす」子どもや「集団に適應できない」子どもに対する不寛容で厳しい「指導」（処罰、叱責、言動の制限、教室からの排除等）が正当化されている。こうした状況の中で、厳しい「指導」に晒される子どもはもちろんのこと、そのような「指導」とは無縁であるように見える子どもたちも、外部からの期待や要求に応えようと自分を押し殺しながら毎日を過ごしている。特にここ数年「新型コロナウイルス感染症対策」を理由に、思いや願いを交流できる子どもと子どもの関係が断ち切れ、様々な感情や要求の源となるような活動が制限される状況が続いてきた。

こうした現実のもと、今改めて子どもの思いや願いを聴き取ることの重要性、必要性が訴えられている。特に、全国生活指導研究協議会（以下全生研と略記）には多くの実践と研究の蓄積があり、子どもの「問題行動」をニーズの表明と捉え、子どもの言動の背後にある思いや願いを聴き取ろうという方向性が共有されている³。その土台には、全生研設立の時代に生活指導の本質は「子どもの声をきく」ことであると述べた宮坂哲文の思想⁴や、「受容」「共感」等を大切にしてきた1990年代以降の「集団づくり」の理論⁵等、戦後生活指導の歴史がある。

1960年代から生活指導の理論的指導者を務めて

きた竹内常一は、2000年頃から「ケア」という語を用いて教育実践を分析し、「ケア」を自身の生活指導論に位置づけようと試みた。竹内の論考において、「ケア」は教師や子どもたちが他者の言葉にならない思いや願いに応答するという実践的事実を可視化し価値づける可能性をもつものであった。しかしながら、「ケア」と「対話」をめぐる考察には課題が残されていた⁶。

本稿では、「ケア」と「対話」に対する考察を通して、教師や子どもたちが他者の言葉にならない思いや願いに応答しているという目に見えない事実を捉える概念として「ケア」を再規定するとともに、その「ケア」の構造を明らかにすることを試みる。

2. 〈我と汝〉から影響を受けた〈ケア〉

（1）ネル・ノディングズの〈ケア〉とブーバー〈我と汝〉の影響

ノディングズは『ケアリング：倫理と道德の教育—女性の観点から』（以下『ケアリング』と略記）をはじめとする著作のなかで、ケアを「専心没頭（engrossment）」と「動機の転移（motivational displacement）」という言葉で表現している。ここでの「専心没頭」とは、「自分自身の中に他のひとを受け容れ、そしてそのひとと共に見たり感じたりすること」である⁷。「動機の転移」とは、「わたしを動機づける活力」が「そのひとの目的に向けて注ぎ込まれる」ことである⁸。ケアに関するこうした記述から、ノディングズのケア概念には、もともと言葉にならない思いや願いへの応答という視点が含まれ得るということがわかる。

これはノディングズがケアに関する考察を深める際に、乳幼児と母親の関わり合いを参照したこととも関係すると考えられる。例えばノディングズは、「赤ん坊が泣き叫んでいるときに、わたしたちはその赤ん坊に応答して、どこか赤ん坊の具合が悪いのだと感じる。どこか具合が悪い。この感情が赤ん坊の感情であり、わたしたちの感情である。その感情を受け容れ、分かち合うのである。」という記述をしている⁹。生まれたばかりの乳児は自身を取り巻く環境や自身の内面を言い表す言葉を持っていない。このような乳児のニーズを満たすために、その子どもが口にする言葉に頼ることはできない。しかしそれでも、その子どもの世話を担う者は、子どもの思いを捉え応答しようと試みる。このことから、「他者の言葉にならない思いや願いに応答すること」としての「ケア」を追究するうえでノディングズに着目することが妥当であることについて、一定の理解を得ることは可能であろう。

ただし、本研究がノディングズに着目するのはこれだけの理由からではない。言葉にならない思いや

願いに応答する可能性をもつノディングズのケアの背景には、マルティン・ブーバーの影響を見出すことができるのである。

ノディングズは、「自らの教育哲学を展開していくうえでブーバーから深い影響を受けた」と明記している¹⁰。ブーバーはその代表的著作『我と汝』において、人間は「汝」との「関係」のなかで「我」となると述べた。ノディングズもまたブーバーと同じく、人と人との「関係」を重視すると共に、「関係」が個人に先立つことを認めている¹¹。ノディングズにおけるブーバーの影響は、こうした彼女の哲学の土台のみならず、そのケア論にも見出すことができる。彼女はケアを説明する際に「ケアするひと (the one-caring)」と「ケアされるひと (the cared-for)」という表現を用いるが、この「ケアするひと」の役割はブーバーの「我—汝関係」の「我」の役割と同じであるという¹²。また、「ケアされるひと」も「我—汝関係」における「汝」と一致することを、ノディングズの記述から読み取ることができる¹³。

後述の通りブーバーの「我と汝」の思想は言葉に依拠しない「対話」の重要性に対する気づきに支えられている。この「我と汝」や「対話」がいかなる意味をもち、どのようにケア論に位置づいているのかを考察することで、「他者の言葉にならない思いや願いに応答すること」としてのケアをより深く理解することが可能となると考えられる。

ところで、ノディングズの「ケア」に対する考察は多岐にわたる。本研究では「他者の言葉にならない思いや願いに応答すること」としての「ケア」を追究する必要性から、ノディングズの記述のなかでもブーバーからの影響を受けている部分を主な考察の対象とすると共に、これを〈ケア〉と山カッコをつけて表記する。また、ブーバーの用いる語のなかには、我々にとって日常的に馴染みのあるものもある。「対話」はその最たるものであろう。しかしながら、ブーバーはそれぞれの語に独特の意味を込めているため、日常語との混同はブーバーの思想を理解する妨げとなる。そこで、本研究においてはブーバーの用いている語を〈対話〉のように山カッコで囲って表記する。〈対話〉のほかに、〈我と汝〉(Ich und Du)、〈呼びかけ〉(Anruf)、〈応答〉(Antwort)、〈関係〉(Beziehung)、〈出会い〉(Begegnung)等の語、及びこれに関連する語をこのように表記する。

(2) 〈我と汝〉とは

ここから、ノディングズの〈ケア〉をより深く理解するためにブーバーの思想を参照する¹⁴。ブーバー曰く、〈我と汝〉は個々に独立した我と汝が結びつくことで成立するのではない。〈我〉と〈汝〉には〈関係〉が先立つ。それゆえ〈我と汝〉は〈我〉と〈汝〉に分解できるものではないが、ここでは〈我

と汝〉に対する理解を深めるために、多少強引であることを承知の上で、〈我〉と〈汝〉それぞれについて確認を進める。

ブーバーは、〈我と汝〉における〈我〉を「我—それ」における「我」から明確に区別している。〈我と汝〉における〈我〉とは、〈我〉に先立つ〈関係〉の中に〈汝〉と共に立つことで現在の瞬間に生きる存在である。「我—それ」における「我」は、関係に先立って独立しており、他者を対象とみなして経験・利用し、空間的・時間的に他の対象物と連関する過去に生きるものである¹⁵。

また、〈我と汝〉における〈汝〉について、ブーバーは「隣りあうもののない、継ぎ目のない全体たる」存在であり、「その存在は天空に充溢する」と表現する¹⁶。「隣りあうもののない」存在とは他の存在との比較によって特徴づけられることのない存在、「継ぎ目のない」存在とは様々な要素から構成されることのない存在と言い換えることができる。すなわち〈汝〉とは、比較されたり分解されたりすることのない、その人の存在まるごとを指す。これをブーバーは「天空に充溢する」と表現しているのである¹⁷。

この〈我〉と〈汝〉は共に〈関係に立つ〉ことで存在するのだとブーバーはいう。〈関係に立つ〉とは〈関係〉のなかで〈汝と呼びかける〉ことと言い換えることができる。ここでの〈汝と呼びかける〉とは、他者に向かって「汝」と発声することを意味するわけではない。〈汝と呼びかける〉こととは、「私の存在そのものの行為、私の本質的行為」である。この「本質的行為 (Wesenstat)」は、〈関係〉に歩み入り、〈汝〉と〈出会う〉ということである¹⁸。

この〈出会い〉のとき、〈我〉と〈汝〉の間には何ものもない。ブーバーは「汝との関係は直接的である」と言う。〈我〉と〈汝〉の間に、「概念的・理解」等といったものはない。ブーバー曰く、「あらゆる仲介物は障碍なのだ。あらゆる仲介物がくずれ落ちてしまったところにのみ、出会いは生ずるのである」¹⁹。さらにこの〈出会い〉は、「世界秩序をまさしく現在として観ることができるような、深い沈黙の底から生じてくる瞬間」である²⁰。〈出会い〉のその「瞬間」に、〈我と汝〉は〈現在〉に生きることができるのだとブーバーはいう。

3. ブーバーにおける〈対話〉

(1) 内面的な〈対話〉

ブーバーの思想において〈対話〉(Zwiesprache)も重要な概念である²¹。私たちが一般的に「対話」という語から想像するのは、言葉に依るコミュニケーションであろう。だが、ブーバーは次のように記している。

人間の交わす対話とは、音声や身振りといった表徴（文字はただ特別な場合においてのみ、たとえば、友人どうしがある会合の席でその場での気分を紙片に書きつけてテーブルごしに取りかわすような場面にのみ、こうした表徴のひとつとなる）のうちにそれ特有の生命を有しているものではあるにせよ、こうした表徴なしにも、そしてむしろ、何らかの即物的に把えられる形式を取ることもなしにも成立し得るのである。むしろ、伝達を成り立たせる或るひとつの要素が——いかにそれが内面的なものであっても——対話の本質の一部をなしているようにおもわれるのだ²²。

すなわち〈対話〉とは、必ずしも音声や身振りや文字を必要としない。〈対話〉の本質は「内面的なもの」(Innerliches) で有り得るのだとブーバーは言う。これは、先述した〈汝〉と〈呼びかける〉こととしての〈出会い〉、すなわち〈我と汝〉に通ずるものであると言えよう。

ブーバーは次のようにも記している。

たとえ会話や意思伝達がおこなわれなくとも、対話的なものを成立させる最低条件のうちには、まさしくひとつのことが、すなわち内的行為の相互性というものが、意味的に不可分な要素としてふくまれているようにおもわれる。実際の対話を通して結ばれているふたりの人間はしたがって、あきらかにそれに先立って内的に向かいあったのでなくてはならない、——つまりそれがどの程度の活動性を有していたかということ、あるいはさらに、どの程度その活動性が意識されていたかということはともかくとして、——向かいあったのでなくてはならないのだ²³。

このようにブーバーは〈対話〉において、「会話や意思伝達」の有無ではなく「内的行為の相互性」(die Gegenseitigkeit der inneren Handlung) を必須としている。

こうした記述などから、ブーバーにおける〈対話〉が独特の意味を持つことがわかる。〈対話〉とは、我々が一般的に「対話」という語から想起するような言葉に依る交流を意味するのではなく、「内面的なもの」なのである。

ブーバーはこの〈対話〉を、ドイツ語で「Zwiesprache」と表記している。興味深いことに、日本語で「対話」と訳すことのできる単語は、ドイツ語に複数存在している。一つが「Dialog」、もう一つが「Gespräch」、そしてブーバーが用いた「Zwiesprache」である。「Dialog」は「対話」や「問答」、英語では「dialogue」、「Gespräch」は「話し合い」

や「会話」、英語では「conversation」「discussion」と訳されることが多く、両者の違いはわかりやすい²⁴。一方、「Zwiesprache」について独和辞典や独英辞典で調べても、「対話」「dialogue」と訳が示されるだけで、特に「Dialog」との違いが捉えにくい。そこで独和辞典で調べてみると、「Zwiesprache」については「(架空の) パートナーと話すこと、例えば死者との対話 (Das Sichaussprechen mit einem [imaginären] Partner: Z. mit dem Toten halten)」と説明されている²⁵。

ドイツ語においてあえて「Zwiesprache」という語を使用するとき、これは精神的な対話、内面の世界²⁶における対話を意味しているのである。日本語はこの意味を厳密に表現する語を持たないため、「対話」という語が訳に用いられたのであろうが、「対話」は「向かいあって話すこと。相対して話すこと。二人の人がことばを交わすこと。会話。対談。」²⁷とされており、必ずしも精神的、内面的なコミュニケーションを意味しない。ブーバーに依拠して〈対話〉という語を用いるときは、〈対話〉としての〈呼びかけ〉〈応答〉を含め、言葉による「対話」と区別される内面的なものであることに注意が必要である。

(2) 〈対話〉のルーツ

ではブーバーはなぜ言葉によらない〈対話〉に着目したのか。この思想の根源はどこにあるのか。

宗教哲学者であるブーバーは若い頃「さまざまなとなみをとまなう通常の生活は遠く向こうにしりぞき、こちらでは、忘却と、光明と、陶酔とが無時間的に、無連続に現出」するような『《宗教的なこと》』を経験してきた。その彼がこのように、人と人の「内的行為の相互性」を土台とする思想に至った背景には、次のような出来事があった。

私はある午前、朝のあいだあの《宗教的》な歓喜におそわれて過したあとの、まだ魂がうつけていたときにひとりの未知の青年の訪問を受けたのである。私は決して友好的に応待しなかったわけではない。私は彼を、他の彼の同年輩者たちよりもいい加減にあしらったのではない(中略)。さて、私は彼と如才なく、うち解けて語りあった、——しかしただ私は、彼が口にしなかった問いを察知せずにすましてしまったのだ。この問いの要点を私が聞き知ったのは、その後しばらくしてから、彼の友人のうちのひとり——あの青年自身はそのときにはもう生きていなかったのだ——を通してである²⁸。

この経験以来ブーバーは、非日常的な「《宗教的なこと》」ではなく、「その外に私が決して連れ出さ

れることのないこの日常というものをしか有してはいない」と信じるようになる。そして、「私は知っているのだ、要請する呼びかけによって私が呼び求められており、応答する責任によって私が応答し得ることを、そして誰が呼びかけ、誰が応答を求めているかを。」と断言するに至る²⁹。すなわち彼の〈我と汝〉と〈対話〉の根底には、他者の「口にしなかった問い」を自分が「察知」することができなかった経験 (ich unterhielt mich mit ihm aufmerksam und freimütig - und unterließ nur, die Fragen zu erraten, die er nicht stellte.) への猛省と、言葉として表現されない思いや願いにも応答し得るはずなのだ、しかもそれは日常においてなされるのだという確信があるのである³⁰。

4. 〈ケア〉の構造

(1) 〈ケア〉と〈対話〉

ここまで、ブーバーの〈我と汝〉とは〈出会い〉であり、これは言葉を伴わない〈呼びかけ〉と〈応答〉であり〈対話〉であることを確認してきた。しかしながら実際の教育実践においてケアの営みが捉えられるとき、そこには必ず言動を伴う「応答」がある。たとえ子どもの思いや願いは言葉として表現されなかったとしても、暴れる子どもを抱きとめるようにして暴力を止めたり、黙ったまま涙を流す子どもに気持ちを代弁するような言葉をかけたりする教師や子どもの姿を、我々は実践記録の中に見ることができる。あるいは、子どもと教師の言葉に依る「対話」、そこにおける子どもからの「呼びかけ」の言葉に対する教師の「応答」の言葉に、〈ケア〉を見出すこともできる。

こうした言動を伴う「応答」は、ブーバーの〈対話〉における〈応答〉とは異なるものである。そこでここからは、ブーバーの思想を手掛かりに教育という営みについて考察を深めたノディングズのケア論にもう一度視点を戻そうと思う。

先述した通り、ノディングズはケアを「専心没頭 (engrossment)」と「動機の転移 (motivational displacement)」という言葉で表現している。この「専心没頭」に関連して、彼女の名著『ケアリング』のなかに、「ケアするひとは専心没頭する。ケアされるひとは『天空を満たす』」という文章が見られる³¹。ここにおける「天空を満たす」という表現は、先述した通りブーバーが〈我と汝〉における〈汝〉を表す際に用いたものである³²。

ノディングズはしばしばこの表現を用いてケアを説明している。例えば同じく『ケアリング』の中で、「出会いにあって、ケアされるひとは、『汝』、つまり、主体であって、『それ』つまり、分析の対象ではない。1回きりの短期間の出会いであれ、繰り返され

る長期間にわたる出会いであれ、出会っている間は、ケアされるひとは、『汝』であり、天空を満たしている。』³³と記している。これは、「ケアするひと」が「ケアの行われている一定期間、完全に、かつ、無差別に他のひとを受け容れている」³⁴状態を、ブーバーの言葉を借りて表現したものであるという。「他のひとを受け容れ」ることは、すなわちノディングズの〈ケア〉における「専心没頭」である。

これらの記述を総合すると、ノディングズは「専心没頭」と「動機の転移」から構成される〈ケア〉における「専心没頭」をブーバーの思想に依拠しながら説明し、これを〈出会い〉(encounter)と表現していることがわかる。ブーバーにおいて、〈出会い〉は〈我と汝〉であり、言葉を伴わない〈対話〉であった。するとノディングズの〈ケア〉それ自体が〈対話〉とイコールなのではなく、ノディングズの〈ケア〉における「専心没頭」がブーバーの〈対話〉であると整理することができる。

(2) 〈応答〉と「応答」

本節の冒頭で、ブーバーの〈対話〉は言葉を伴わないものであるが、現実のケアの営みには言動を伴う「応答」が見られることを指摘した。その上で、ノディングズの〈ケア〉を構成する「専心没頭」と「動機の転移」のうち、「専心没頭」こそが〈対話〉であることを示した。すると、現実のケアの営みにおける言動を伴う「応答」は、「専心没頭」ではなく「動機の転移」に関連するのではないかと考えられる。

「動機の転移」とは、「専心没頭」によって他者を受け入れ他者と共有したニーズを満たすことを行為の動機とすることだとノディングズは説明している。乳児の泣き声から寂しさや不安を感知し優しく抱き上げる、うつむく子どもに対して「友達のためだったのよね」と理解を示す言葉をかける等の言動を「動機の転移」は導く。これこそが、ケアにおける「応答」として連想されるものである。すなわちケアの営みにおける「応答」は、「動機の転移」に導かれるものであり、「専心没頭」における〈応答〉と区別して考えなければならない³⁵。

以上のことから、「専心没頭」と「動機の転移」から構成される〈ケア〉は、内面的な〈対話〉(〈呼びかけ〉と〈応答〉)を通して他者の言葉にならない思いや願いを聴き取り、これに言動を伴って「応答」することであると、言い換えることができる。

5. おわりに

本稿では、ノディングズの〈ケア〉とブーバーの〈我と汝〉及び〈対話〉を考察することで〈ケア〉の構造を明らかにし、教師や子どもたちが他者の言葉にならない思いや願いに「応答」しているという目に見えない実践的事実を捉える仮説的な概念として〈ケア〉

を規定しようと試みた。

第1節では、ノディングズの〈ケア〉にブーバーの〈我と汝〉が多大な影響を与えていることと、〈我と汝〉とは何かを確認した。第2節では、この〈我と汝〉は言葉を伴わない〈対話〉であること、その思想の根底には言葉として表現されない他者の思いをめぐるブーバーの経験と反省があることを確認した。第3節では、この〈対話〉が〈ケア〉を構成する「専心没頭」と「動機の転移」のうち「専心没頭」にあたること、それゆえ〈対話〉における〈応答〉は「動機の転移」に導かれる「応答」と区別されることを明らかにした。以上の考察を通して、〈ケア〉とは、内面的な〈対話〉を通して他者の言葉にならない思いや願いを捉え、これに言動を伴う「応答」をすることであると規定した³⁶。

この規定により、教師や子どもたちがごく自然に、時に無自覚に行っている〈ケア〉の働きかけを実践からすくいだして共有可能なものとし、理論の中に位置づけることが可能になると考えられる。一方で、このように〈ケア〉の構造を整理し規定することは、実践においてしばしば見られるケアの営みとは馴染まないかもしれない。実践記録等を読んだり、現場に足を運んだりすると、教師や子どもたちは他者の言葉にならない思いや願いに即座に言葉や行動を返しており、〈応答〉と「応答」は時間的にほとんど重なっているように見えるからである。しかしだからこそ、その応答の瞬間が理論的には異質の〈応答〉と「応答」として区別されうることが、教育における〈ケア〉を考える上で重要なことである。

これを区別することで、長期的な営みや時間的に隔たりのある働きかけを〈ケア〉として捉えることが可能となる。教育実践においては、子どもの行動や態度から言葉にならない思いを捉えた教師が、その日の放課後に子どもに声をかけたり、長い期間をかけて繰り返し子どもに働きかけたりする場面も見られる。子どもの言葉にならない思いや願いを捉えることとしての〈応答〉と、これに対する言動を伴う「応答」を区別することで、上述したような実践的事実を〈ケア〉という概念で捉えなおすことができるようになる。

また〈応答〉と「応答」を区別する〈ケア〉の定義から、他者の思いや願いを聴き取ったうえで、「応答」する以外の方法がありうることが示唆される。すなわち、他者の言葉にならない思いや願いを捉えた後に、その思いや願いを満たすことを目的とする言動とは異なる教育的な働きかけが続くことを、〈ケア〉と区別して説明することが可能となる。生活指導の実践においては、教師が子どもの言葉にならない思いや願いを捉えつつ、あえてこれに「応答」するのではなく、「問いたです」「要求する」といった

方法をとる場面が見られることがある。こうした働きかけと〈ケア〉の共通性や相違性を、理論的に整理することが可能となるのではないかと考えられる³⁷。

さらに、〈対話〉における〈応答〉を〈ケア〉の必要条件とすることで、〈対話〉を伴わない「ケア」的な言動等を〈ケア〉と区別することが可能となる。教育だけでなく医療や看護、介護、保育等の現場では、しばしば「ケア」的な言動がパターンリズムに陥ることがある。例えば学校教育において、教師が自身の価値観や理念を子どもに押し付けることがあっても、その際の教師の態度や言動、或いは押し付けている価値観そのものが「ケア」的なものであれば、この教師の働きかけは「子どものため」であると捉えられ批判を受けにくい。しかし、どれだけ周囲が「ケア」だと認定し、教師自身が「子どものため」と考えていたとしても、その働きかけに〈対話〉が無ければ、これは〈ケア〉と明確に区別される。内面的な〈対話〉を通して他者の言葉にならない思いや願いを捉えこれに「応答」することとしての〈ケア〉は、教師の独りよがりな「ケア」的な言動等を批判的に捉え直すことを可能にする。

今後は、他者の言葉にならない思いや願いを捉え、これに応答することとしての〈ケア〉を仮説概念として、子どもたちと教師とが心の内に抱えるものを交流し応答し合いながら創造している教育実践を読み解くことで、これが仮説的な概念に留まらないことを確認していく予定である。その上で、改めて教育及び生活指導における〈ケア〉の重要性と可能性を追究することを課題としたい。

¹ 本文中で言及した順に記す。

Gilligan, Carol. In a Different Voice:

Psychological Theory and Women's

Development, Harvard University Press, 1982.

= キャロル・ギリガン著、岩男寿美子監訳、生田久美子・並木美智子共訳『もう一つの声—男女の道德観の違いと女性のアイデンティティ』川島書店、1986年。

Noddings, Nel. *Caring: A Feminine Approach to Ethics and Moral Education*, University of California Press, 1984. = ネル・ノディングズ著、立山義康 他訳『ケアリング：倫理と道德の教育—女性の観点から』晃洋書房、1997年等。

M・シモーヌ・ローチ著、鈴木智之・操華子・森岡崇訳『アクト・オブ・ケアリング』ゆみ出版、1996年。

Mayeroff, Milton. *On Caring*, Harper & Row,

1971. = ミルトン・メイヤロフ著、田村真・向野宜之訳『ケアの本質—生きることの意味』ゆみる出版、1987年。

Ruddick, Sara. *Maternal Thinking: Toward a Politics of Peace*, Boston: Beacon Press, 1989.

エヴァ・フェダー・キティ著、岡野八代・牟田和恵監訳『愛の労働あるいは依存とケアの生議論』白澤社、2010年。

上野千鶴子『ケアの社会学—当事者主権の福祉社会へ』太田出版、2011年。

岡野八代『フェミニズムの政治学—ケアの倫理をグローバル社会へ』みすず書房、2012年。

² 本研究は「他者の言葉にならない思いや願いに応答すること」に焦点をあてるものではあるが、思いや願いを言葉にすることを否定するものではない。むしろ、言葉にならない思いや願いに応答される経験や関係が、自らの思いや願いを自覚し、他者に向けて表現していくことにつながっていくと考える。

³ 全生研は、「集団主義的学級集団づくり」が1960年代頃に一世風靡したこと、その理論的指導者である竹内常一が『生活指導の理論』（明治図書、1969年）において自由主義的な教育を厳しく批判したことなどから、集団主義的な側面が注目されてきた。しかしながらその設立から現代にいたるまでの理論と実践の経過を俯瞰すると、方法的な違いはありながら、「子どもの声をきく」ことが軸となっているのではないかと考えられる。この点については今後追究したい。

⁴ 宮坂哲文「生活指導の本質」宮坂哲文編『明治図書講座・学校教育・第11巻 生活指導』明治図書、1956年。

⁵ 全生研常任委員会編『新版学級集団づくり入門 小学校編』明治図書、1990年、『子ども集団づくり入門』明治図書、2005年等参照。

⁶ 星川佳加「竹内常一の生活指導論における「ケア」の変遷」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第16巻第1号、2022年9月。晩年の竹内の論考においては、「ケア」における「出会い」としての「対話」と、従来の生活指導論における「対話・討論」としての「対話」が混同され、その結果「ケア」は相互応答性を失い「集団づくり」に段階論的に位置づけられている。

⁷ ネル・ノディングズ著、立山義康 他訳『ケアリング：倫理と道德の教育—女性の観点から』晃洋書房、1997年、p.46。

⁸ 同上、p.51。同書別の箇所ではノディングズは、「動機の転移」について、「夜泣きするわが子に応答」する際に「わたしは、ごく自然に、子どもの苦しみを和らげたいと思う」状況を例に出し、「わ

たしを動機づける活力は、そのひとに向かって、おそらく、そのひとのねらいに向かって放出される」と説明している（p.28）。

⁹ 同上、p.48。

¹⁰ ネル・ノディングズ著、宮寺晃夫訳『教育の哲学：ソクラテスから「ケアリング」まで』世界思想社、2006年、p.99。

¹¹ Nel Noddings. *The maternal factor: two paths to morality*, University of California Press, 2010, p.126.

Nel Noddings. *Education and democracy in the 21st century*, Teacher College Press, 2013, p.118.

¹² ネル・ノディングズ著、立山義康ほか訳『ケアリング：倫理と道德の教育—女性の観点から』晃洋書房、1997年、p.116。

¹³ 同上、pp.116-117、p.272。

¹⁴ ブーバーの思想については、主にマルティン・ブーバー著、田口義弘訳『我と汝・対話』みすず書房、1978年、補足的に植田重雄 訳『我と汝・対話』岩波書店、1979年を参照した。ドイツ語は Martin Buber, *Ich und Du*. Reclam, 1983, Martin Buber. *Das dialogische Prinzip*, Gütersloher Verlagshaus, 2006 にて確認した。

ブーバーは、第一次世界大戦後ヨーロッパ全体が不安と混乱に覆われる時代に“*Ich und Du*”（1923）を、その約10年後に続編とされる“*Zwiesprache*”（1932）記した。

¹⁵ マルティン・ブーバー著、田口義弘訳『我と汝・対話』みすず書房、1978年、p.9、pp.14-15、pp.19-20、p.27、p.32、p.35、p.47 等参照。

¹⁶ 同上、pp.13-14。ドイツ語では「Sondern nachbarnlos und fügenlos ist er Du und füllt den Himmelskreis.」と表現されている（Martin Buber. *Ich und Du*. Reclam, 1983, S.9）。「Himmelskreis」は「天球」、「天緯」（例えば「天の赤道」）等と訳される（『独和大辞典 第2版』小学館、2000年、『アクセス独和辞典 第3版』三修社、2010年参照）。

¹⁷ 後述する通り、ノディングズは「ケアするひと」が「専心没頭」する際の「ケアされるひと」について「天空を満たす」表現している。この表現は、ここから引用されている。ノディングズのケアにおいて、「ケアされるひと」は比較や分解によって理解され得るような存在ではないのである。

¹⁸ マルティン・ブーバー著、田口義弘訳『我と汝・対話』みすず書房、1978年、pp.17-18。

¹⁹ 同上、p.18。

²⁰ 同上、pp.43-44。

²¹ 本項におけるドイツ語は以下の文献にて確認し

た。Martin Buber. *Das dialogische Prinzip*, Gütersloher Verlagshaus, 2006.

- ²² マルティン・ブーバー著、田口義弘訳『我と汝・対話』みすず書房、1978年、p.190。(Martin Buber. *Das dialogische Prinzip*, Gütersloher Verlagshaus, 2006, S.144.)
- ²³ 同上、pp.197-198。(Martin Buber. *Das dialogische Prinzip*, Gütersloher Verlagshaus, 2006, S.149.)
- ²⁴ 『独和大辞典 第2版』小学館、2000年、『アクセス独和辞典 第3版』三修社、2010年、*Oxford German Dictionary THIRD EDITION German-English*, Oxford University Press, 2008 参照。
- ²⁵ *Duden Deutsches Universalwörterbuch 6. Auflage*, Bibliographisches Institut GmbH, 2007.
- ²⁶ なお、ドイツ語には「内面の世界」を一言で表す「Innenwelt」という語がある。これは日本語で「精神世界」と訳されている(『アクセス独和辞典』)。だが国語系の辞典(『広辞苑』第七版、岩波書店、2018年、『大辞林』第四版、三省堂、2019年、『大辞泉』増補・新装版、第二刷、小学館、1998年のほか、『デジタル大辞泉』『名鏡国語辞典』『ブリタニカ国際大百科事典』を参照)に「精神世界」の語が掲載されていないことから、これは日本語として必ずしも定着したものではないことが伺える。
- ²⁷ 『広辞苑』第七版、岩波書店、2018年、p.1773。
- ²⁸ マルティン・ブーバー著、田口義弘訳『我と汝・対話』みすず書房、1978年、pp.209-210。原文ママ。(Martin Buber. *Das dialogische Prinzip*, Gütersloher Verlagshaus, 2006, S.158.)
- ²⁹ 同上、p.210。
- ³⁰ このエピソードについてはノディングズも自身の著作の中で触れている(Nel Noddings. *Starting at home*, 2002, p.16-p.17)。また、岩波文庫版の日本語訳『我と汝・対話』(植田重雄訳『我と汝・対話』岩波書店、1979年)の訳注12にも、このエピソードはブーバーが「対話的現存在の思想へと転換する機縁となった」(p.256)と記されている。
- ³¹ この「天空を満たす」という表現は、これら『ケアリング』における記述の他に、Nel Noddings, Paul J. Shore. *Awakening the inner eye : intuition in education*, Teachers College, Columbia University, 1984, p.63, p.73 や、Nel Noddings. *Starting at home : caring and social policy*, University of California Press, 2002, p.16-p.17 にも見られる。これらの中では、「出会い(encounter)」を表現することに伴って用

いられている。

- ³² マルティン・ブーバー著、田口義弘訳『我と汝・対話』みすず書房、1978年、p.13。
- ³³ ネル・ノディングズ著、立山義康ほか訳『ケアリング：倫理と道德の教育—女性の観点から』晃洋書房、1997年、p.272。
- ³⁴ 同上、p.271。
- ³⁵ なお、「動機の転移」が生じるときには「専心没頭」も必ず生じているが、「専心没頭」の結果必ず「動機の転移」が生じるとは言い切れない。「専心没頭」に続いて「動機の転移」が生じず、〈ケア〉が成立しないという状況は多々想定される。例えば教師が、Aさんが話を聞いてほしいようにしていること感じ取っていながら、Bさんの対応が大変であることを理由に声をかけない(かけることができない)という状況は、現代の多忙な教育現場においてしばしば起こっているのではないと思われる。
- 「専心没頭」に続いて「動機の転移」が生じる場合、単純な例を挙げれば、Aさんに対して教師が「何かあった？」と声をかけ、Aさんが「あのね…」と語り始めることで、「対話」は成立する。この時、教師はAさんの「話を聞いてほしい」という言葉にならない思いを〈対話〉すなわち〈呼びかけ〉と〈応答〉において感得し、これに「応答」している。

一方「専心没頭」に続いて「動機の転移」が生じない場合、話を聞いてほしいようにしているAさんに対して教師は声をかけない(場合によってはAさんの思いを感得しているからこそAさんを避けてしまうという事態も考えられる)ため、「対話」は成立しない。この時、教師はAさんの「話を聞いてほしい」という言葉にならない思いを〈対話〉すなわち〈呼びかけ〉と〈応答〉において感得しているが、これに言動を伴う「応答」はしていない。

したがって、「専心没頭」としての〈対話〉(〈呼びかけ〉と〈応答〉)と、「動機の転移」に導かれる「対話」及び「応答」は区別される。

- ³⁶ 本研究では、〈ケア〉を内面的な〈対話〉を通して他者の言葉にならない思いや願いを捉え、これに言動を伴う「応答」をすることであると規定した。この規定では、「ケアされるひと」は言葉にならない思いや願いを抱える者として既に存在しており、「ケアするひと」はその思いや願いを捉えるものだという理解を導いてしまう危険性がある。これは筆者の意図と異なる。

ノディングズの〈ケア〉を構成する「専心没頭」はブーバーの〈我と汝〉から多大な影響を受けていること、ブーバーは〈関係〉が〈我〉〈汝〉

に先立つとしていること、ノディングズもこれに同意していること等から、「ケアされるひと」は「ケアするひと」との〈関係〉において、思いや願いを抱える者として存在するのだということが出来る。例えば、暴力的な言動をとる子どもは、「寂しい」という思いを抱えながら暴力的に振舞っているのではなく、その子どもを「寂しい」という思いを抱える者として遇する他者との関係において初めて「寂しい」という思いを抱く者として存在するのである。

しかしこのような例を挙げると、「ケアするひと」が「ケアされるひと」の思いや願いを予測したり方向付けたりする可能性があるのではないかという疑念が生じる。(実際にノディングズの理論は、ブーバーの「教育論」を援用する際に、教師が子どもの内面を方向付けるような働きかけをすることを許してしまっている可能性が指摘できる。マルティン・ブーバー著、山本誠作訳「教育論」、『ブーバー著作集 8 教育論・政治論』みすず書房、1970 年及びネル・ノディングズ著、立山義康ほか訳『ケアリング：倫理と道德の教育—女性の観点から』晃洋書房、1997 年等参照。)これも筆者が〈ケア〉として想定するものではない。

ブーバーの記述に依拠しながら、〈関係〉において〈我〉〈汝〉となること、この〈出会い〉の瞬間〈我〉と〈汝〉の間には「概念的理解」や「予知」「夢想」「記憶」「目的」「欲念」「先取」「憧憬」等の「仲介物」は何もないことを、改めて強調しておきたい。

³⁷ さらにこのことから、戦後生活指導史を整理し直すことも可能なのではないかと考える。今後追究していきたい。